



## 21 世紀 COE 最終評価を受けて

神奈川大学副学長／21 世紀 COE プログラム拠点形成委員会委員長

池上 和夫

昨年 3 月をもって終了した 5 年間にわたる本学の 21 世紀 COE プログラムに対する最終評価が、昨年 12 月に公表され、「設定された目的は十分達成された」という高い評価を受けました。既にご存じのことと思いますが、このいわば A ランクの評価は、同じ学際等の領域、25 プログラムのうち、本学も含め 6 プログラムにすぎません。その上、さらに、A ランクの中でも特色があるプログラムとして本学のプログラムが取り上げられています。

中間評価においては、「当初目的を達成するには……一層の努力が必要と判断される」と評価されていただけに、最終的にこのような高い評価を受けた事は大きな喜びであります。

このような高い評価を受けたことは、なによりも、拠点リーダー、福田アジオ教授をはじめ、サブリーダー、研究遂行責任者、拠点事務局長など、実質的に運営を担ってきた研究推進会議の皆様方のご努力の賜物であります。さらに、事業を担った 20 余名の事業推進担当者のほか、COE 教員、COE 共同研究員、PD・RA などの COE 研究員、海外からの参加者などのご協力が大きな力となっております。あわせて心からお礼申し上げます。

ところで、改めて振り返ると、21 世紀 COE プログラムに本学が採択された 2003 年度（当事業開始 2 年度目）においては、申請大学 225 校、611 件、うち採択大学 56 校、133 件という厳しいものでありました。さらに、本学のプログラムの領域、「学際、複合、新領域」は、件数のみでみると、176 件中、25 件採択されたにすぎず、採択率は他の 4 分野に比べますと一段と厳しく、とりわけ、私学からの申請は、66 件に対して採択数はわずか 6 件のみであり、同領域の採択率は、国立の 2 分の 1 以下でありました。

鳴り物入りで開始されたこの事業は、2001 年 6 月の「大学の構造改革の方針」に基づき、国立大学の再編・統合、法人化とともに、第三者評価による競争原理を導入して、「世界的な研究教育拠点の形成を重点的に支援

し、もって国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進する」趣旨のもとに創設されたもので、対象は国公立大学となっています。しかし、文科省の狙いは主に国公立、特に法人化にあわせた、国立大学を主体とした事業であったことは明らかであると思われます。こうした中で、本学のプログラムが高い競争率の中で採択され、しかも、最終評価において高い評価を受けたということは、誠に誇るべき、名誉なことでもあります。

とはいえ、重要なことは、もちろん、高い評価に驕ることなく、申請し採択されたプログラムの質・内容をさらに充実させ、発展させていくことでもあります。採択理由にある、「非文字資料の収集・整理・体系化は日本常民文化研究所とわが国唯一の歴史民俗資料学専攻大学院をもつ神奈川大学が拠点となることが最もふさわしい」ことをこれからも活かしていくことが肝要です。まさに、初心忘るべからず、であります。

最後に、国立大学法人などに比べ、教職員数等ひとつとっても限られた条件のもとで、このような「国家的事業」を遂行するためには、大学全体の支援・協力が不可欠なものでありましたが、幸い、最終評価においても「特に大学全体として、多様かつ強力な支援を行ってきたことは高く評価できる」と記されているとおり、事業遂行中は法人側からも十分ご理解いただき、財政面、支援スタッフなどの面で支援していただきました。この点に厚く感謝申し上げます。この 21 世紀 COE の成果を踏まえ、グローバル COE へ申請する当事業の後継組織・拠点である日本常民文化研究所非文字資料研究センターなど、関係機関に対しましてこれからも更なる全学的支援をお願いいたします。

尚、21 世紀 COE プログラム拠点形成委員会は、今回の最終評価の結果を俟って、規定により、一旦、廃止されますが、今後、全学的な教育研究活動がますます活発となり、当委員会に類する組織が再び必要とされる時が来ることを願ってやみません。